說林

蠕蠕の國號及び可汗號につきて

藤田豐八

一

支那の北方塞外を統一した民族に、之を初にして匈奴があり、匈奴の衰ふるや、鮮卑之に代り、その塞内に入りて魏朝を建つるや、蠕蠕踵ぎて興り、更に塞外を統一して魏朝の强敵となつた。此等民族及びその後に現はれたる支那史家の所謂東胡民族の諸國につきては、さきに白鳥教授が「東胡民族考」なる一大雄篇を著し、明治四十三年四月より、大正二年七月に至るまで約四箇年に亙り、之を十四割に分ち、斷續して『史學雜誌』に依り、世に發表せられた。

教授は此篇に於て支那史家の所謂匈奴及び東胡が蒙古族を本幹とし Tungusc 族を加味したる民族なることを地理上及び言語上より闡明せられたのであるが、蠕蠕につきても、その第十回(『史學雜誌』第二十三編第十號)に於て、此國の名稱、可汗の稱號及び人名等を蒙古語及び滿洲語を以て說明せられて居る。たゞ予輩の研究によれば、此民族は純然たる蒙古族であり、その可汗の稱號の如き、專ら蒙古語を以て說明し得らるゝやうである。いふまでもなく此可汗の稱號には魏書に一一その意義を擧げ、そしてそが當時この民族と最も密接なる關係を有せし魏人の言ふところであるから、最も信を置くに足らうと想ふ。以下試に之を解釋し、兼てその國號等に言及しやうと思ふのであるが、此一小篇が白鳥教授の研究に負ふところの多大なるは固より言ふまでもない

ことである。

一

さて『魏書』蠕蠕傳(卷一〇三)に據ると、魏太祖の時蠕蠕の主社崙　塞外の諸部を幷せ、所謂「其西則焉耆之地、東則朝鮮之地、北則渡沙漠窮瀚海、南則臨大磧」に至り、自ら

丘豆伐可汗　と號したといふ。而して魏の史家は之を解して「丘豆伐猶魏言駕馭開張也、可汗猶言皇帝也、蠕蠕之俗、君及大臣　因其行能、即爲稱號、若中國立謚、既死之後、不復追稱」といつて居る。これは杜佑の『通典』邊防典蠕蠕條(卷一九七)にも見えて文字も同樣であるが、獨り『北史』蠕蠕傳(卷九八)には、「丘豆伐」を「豆伐」に作つて居る。尤も『魏書』の卷一〇一から一〇四までは殘闕して、今の『魏書』の此等の卷は『北史』に依りて補つたのではあるが、しかし『北史』にも「豆伐」及びその他の可汗の名號を解して「猶魏言云云」といつて居るのを視ると、『北史』はもと殘闕前の『魏書』に採つて此等の傳を作つたものであることが知れる。そして通典にも均しく「丘豆伐」とあれば『北史』の「豆伐」は　丘豆伐」の譌誤と見なければなるまい。此語につきては既に白鳥教授が蒙古語「指揮する」「處理する」の義を有するKütele,「手綱」「統制」の義を有するKütelburi を擧げ(Schmidt, Mongolisch-Deutsch-Russisches Wörterbuch, p. 187)、「丘豆伐」の「丘豆」を Kütele の略譯と視、なほ「伐」を蒙古語「開張する」「擴大なる」の義を有するbidara の省譯と視て居らるゝ(東胡民族考第十回、以下同じ)。かゝれば「駕馭開張」といへるには吻合するが、badarn を「伐」で表はしたとしては、餘りに省略に過ぐるの憾がある。予輩は寧ろ「丘豆伐」を以て Kütelburi の對音ではなからうかと想ふ、即ち「豆」を以て tele に對し「伐」を以て buri に對したのでなからうかと想ふのである。いふまでもなくKü-

teleburiは「先導する」「處理する」などの義を有する動詞 kütele に buri なる接尾語が添つて名詞となつたのであつて、乃ち「手綱」「統制」などの意義が出來たのであるが、已に原動詞に「先導する」「處理する」などの意義があるとすると、この名詞に駕馭と共に「開張」の意義が含まれて居ないこともないやうである。因に此二字は『史記』申屠嘉傳(卷九六)の「以材官蹶張」とある徐廣の註に「勇健有材力開張」といへるが初見の樣である。こゝでは弩を張るの義である。されば「駕御開張」は「騎射」を謂つたともいへるが、しかし『史記』項羽本紀(卷七)の張守節の『正義』には又別の義に用ひて居る。即ち項羽が垓下に敗れて南走するや、「是時赤泉侯爲騎將、追項王、項王瞋目叱之、赤泉侯人馬俱驚、辟易數里」とある『正義』に「言人馬俱驚、開張易舊處、乃至數里」とあるがそれである。

社崙に嗣いで可汗となつたのは、その弟斛律である。之を

蠕蠕の國號及び可汗號につきて

藹苦蓋可汗　といつたといふ。史家は之を「魏言資質美好也」と解釋して居る。白鳥教授は「風習」「性質」「資質」の義を有する蒙古語 djang の原形を yang と視、その古音を jak, yag と做し、「藹苦」をその對音と想し、又た「蒙古語にて美好を gowa といひ、Tunkinsk 語に goje, Aralsk 語に goji といふ。蠕蠕語藹苦蓋の蓋はこの gowa の對音ならんか」といつて居らるゝ。しかし予輩は史家が「魏言資質美好也」といへばとて、必ずしも「資質」と「美好」との兩義を別々に「藹苦蓋」なる語中に鑿穿する必要はなからうと想ふ。即ち此語は魏でいへば「資質の美好なる」義であると謂ふに過ぎまいと想ふ。從て予輩は此語を蒙古語 Ukhagan の對音であらうと想ふのである。いふまでもなく蒙古語では語末の n は往往にして或は添加せられ或は省略せらるゝから Ukhagan は Ukhagan ともいひ得るのであり、又た藹は「于蓋」の切、苦は康上の切であれば、「藹苦蓋」を Ukhagan の對音

にして何等の支障もないやうである。そして此蒙古語には「智慧」「聰明」の義あれば（Schmidt, p. 47.）、魏の史家は之を「資質美好」と釋したのであらう。

斛律に嗣いで、一時その子步鹿眞が立つたが、之を殺して可汗となつたのが、此國に有名な大檀である。之を

牟汗紇升蓋可汗　といひ、史家は之を解釋して「魏言制勝也」といつて居る。白鳥敎授の「東胡民族考」には此語の説明を缺いて居る。さて蒙古語で「全勝する」「絶滅する」「敵をして抵抗するの力なきに至らしむる」を mükügekü（Schmidt, p. 222）, mokhoghakhou（Kowaleuski, Dictionnaire Mongole-Russe-Française, p. 2032）といひ、その名詞の形を mükügemokhogha といふ。「牟汗紇升蓋」の「牟汗紇」は此mükügemokhogha の對音であらう。又た蒙古語で、ある名詞に sek, sak の接尾語を附すれば「‥好み」「‥ずき」の義となる（ルードネフ蒙古文法九三頁）。「升蓋」はこの sek, sak の對音であらう。即ち「牟汗紇升蓋」mükügesek, mokhoghasak は「好全勝的」「好絶滅的」の義で、史家は之を制勝と釋したものと見える。

大檀に嗣いで立ち、可汗となつたのはその子吳提である。之を

勅連可汗　と號し、史家は之を「魏言神聖也」といつて居る。そして白鳥敎授が之を「天」「神」の義を有する蒙古語 Tegri の對音としたのは蓋し動かざるところであらう。なほ敎授は「勅」に tek, tik の音ある例として『宋雲行紀』の「敕懃」tegin, tigin を擧げて居らるゝが、この語はなほ『魏書』（卷七四）爾朱榮傳にも「勅勤北列步若、反於沃陽」と見え「勅勤斛律洛陽、作逆桑乾、西輿費也頭牧子、迭相掎角」といひ、均しく tegin, tigin であらうと想へるものを「勅勤」で譯して居る。又た『宋書』（卷九五）にはこの語であらうと想へるものを「直懃」といつて居るが、「勅」「直」は邦音でも同一である。

吳提に嗣いで可汗となつたのはその子吐賀眞である。之を

處可汗　と號し、史家は之を「魏言唯也」と解して居る。こは白鳥教授の已に指摘した如く、『宋書』吐谷渾傳(卷九六に見ゆる「處可寒」の「處」と同一で、此書には「處可寒」を解して「宋言爾官家也」といつて居る。そして此語が蒙古語 dje(然りの義)の對音であることは又た同教授の已に說明した通りである。

吐賀眞が死んでその子予成が立ち之を

受羅部眞可汗　といつたといふ。史家は之を解して「魏言惠也」といつて居る。白鳥教授は「滿洲語にて可憐を djilakan, djilun, dsilaksuka と云ひ、慈を dsila といひ、女眞語にて憐憫を只剌與、憐むを只剌埋といふ、蠕蠕語の受羅部眞の受羅は上の諸語と同語なるべし云云」といひ、「部眞」の比定は試みられて居ない、予輩はこの「受羅」を「好運」「天惠」「福德」の義を有する蒙古語 žol(žul) の對音であらうと思ふ。この žol(žul) は元代の蒙古人が每にその可汗の名の上に加へた美稱である。又た蒙古語 bujin は「仁德」「慈惠」の義を有する(Schmidt, p. 118)。「部眞」は或はこの對音であらうと想はるゝが、或は「受羅部眞」は zulul'ăi (dsonlouubutchi) の對音であるかも知れない。こは žul に băi なる語尾を添加した語で u は語尾接合の爲め用ひられたに過ぎない。凡そ或る名詞に băi なる語尾を添加すると、その事物に用ゆる蓋又は箱を示す、例せば ăihi(n) 即ち耳が ăihibăi 即ち(寒氣を防ぐ爲めの)耳蓋となるが如くであるが(ルードネフ蒙古文法第八七頁)、žul に băi を添加したる žulubăi も同樣に「天惠を保有するもの」などの意があつたらうと想ふ。たゞ今は此意が失はれたものが單に「車の坐席に入る爲めの鐵環」の義であるといふ(Kowaleuski, p. 2389.)。

予成に嗣ぎてその子豆崙が立ち、之を

伏古敦可汗　と號したといふ。史家は之を解して

「魏言恒也」といつて居る。白鳥教授は Turk 語族の中突厥語に永久長生を büngü といひ、他の Turk の方言にて之を müngü といへば、今日蒙古語にて長生を mönkhö, mönkhü といふも、往昔は之を bönkhö, büngü といつた處があつたと推測しても不可なからうと推し、この「伏古敦」の「伏古」は bönkhö (mönkhö) の訛音であらうと說き、なほ「今日の蒙古語にて monke, mönkhö(bönkhö) といふを蠕蠕語にて böke, bökhö (möke, mönkhö)といひけん」と想し、又た「伏古敦」の「敦」は蒙古語 tu, du の對譯で漢語の「的」「有」に當る語尾であるといつて居らるゝ。この「伏古敦」に音聲上最も類似せるものは「神性の人」なる義を有せる蒙古語 Bogda である(Schmidt, p. 112)。こは可汗の號として相應はしいが、しかし此語に「恒」の義がない。たゞこの「神性」が「長生」を意味するものとせば、「恒」に因緣がないこともないやうである。即ちこの語はもと「長生の人」なる義より、「神性の人」なる義になつたと想はれないでもない。そは白鳥教授も引ける『元史』憲宗紀に憲宗の諱「蒙哥」monké の由來を說き、「母莊獻太后怯烈氏、生憲宗時、有黃忽答部・知天象者、言帝後必太貴、故以蒙哥爲名、蒙哥者華言長生也」といへるにても推測せらるゝやうである。是は支那人も同樣で「久則天、天則神」と『史記』樂書(卷二四)『禮記』(樂記)にも見えて居るのは「太貴」と「長生」との間に何等か關係があるものと考へたやうである。しかしこはなほ推測に過ぎない。蒙古語には他に beki, bekitu といふ語がある、後者は前者に形容詞の語尾 tu の添加せられたもので意義は同一である。更にこの語源を繹ぬると bek (墨)より轉化したものらしい。そしてこの beki, bekitu には「貞固」「强健」「永續」等の義がある (Kowalewski, p. 1125)。想ふに「伏古敦」はこの bekitu(n)の對音であらう、そして此語に「貞固」「永續」の義があるから、魏の史家は之を「恒」と解したものと見え

る。いふまでもなく「恒」は「常」の義があると共に「久」の義があり、こゝの「恒」は「貞固不變にして永續する」の意であらう。尤も「伏」を以て be に對するはいかゞと想ふものもあらうが、しかし蒙古人は「墨」をbekといひ、又た佛書などに Vêda を「伏陀」と譯してある(Eitel, Hand Book of Chinese Buddhism, p. 196.)などより視れば、何等の不都合もないやうである。又た梵語 karpāsa 馬來語 kapas(棉)を或は「古貝」と譯し、或は「吉貝」と譯するなどより視れば「伏古敦」でも「伏吉頓」でも音譯上さまでの差異はないやうである。要するに伏古敦を bekitu の對音とせば、意義上より視、音聲上より視、最も穩當であらうと信ずるのである。

豆崙に嗣いて可汗となつたのはその叔父那蓋であり、之を

侯其伏代庫者可汗　と號したといふ。そして史家は之を「魏言悅樂也」と解して居る。白鳥敎授はこの可汗號に言及して居ない。さて蒙古語で「幸福に與かる」「共に幸福を享くる」を kešak birdakü といふ(Schmidt, p. 154.)。「侯其伏代庫者」の「侯其」は kešak の對音である。birdakü の語幹は birda であり、この動詞に gëëi なる語尾を添加すれば名詞となりて、その行爲を爲す者を示すことゝなる。「侯其伏代庫者」の「伏代庫者」はこの birdagëëi の對音であつて、「與るもの」「共に享くるもの」の義である、即ち「伏」を以て bir に對し「代」を以て da に對し、庫者を以て gëëi に對したのである。史家は「幸福に與るもの」「共に幸福を享くるもの」は即ち悅樂するを以て、直に之を「悅樂也」と譯したものと見える。

那蓋に嗣ぎて可汗となつたのはその子伏圖である。之を

他汗可汗　と號し、史家は之を「魏言緒也」と解して居る。白鳥敎授は蒙古語族の中、東蒙古語にて「絹紐」を utasun, utasu といひ、Nezeudinsk 語にて

utuhang, utohon といひ、Tunkinsk 語にて utahang といひ、Khorinsk 語にて utahan, Selendinsk 語にて utaso といひ、又 Tunguse 語にて之を utahan といへるを擧げ、蠕蠕語の「他汗」は utahang の對音であらうといひ、又た然らざれば、女眞語にて「線」を「脫弋」といひ、滿洲語にて之を tonggo といひ、又た蒙古語にて「細き綱・紐」を degesün といひ、Buriat 語にて「馬の手綱」を dêhang, dêhan, dehan, dehang といへば「他汗」はこの dehan, dehang の對音であるかも知れないといつて居らるる。しかし魏書の所謂「緒」は「綱」「紐」等の義ではあるまい。いふまでもなく、「緒」の原義は「絲端」である。そして『詩』魯頌に「纘太王之緒」、『周官』天官宮正に「稽其功緒」といひ、注に「緒其志業」とあるなど、遂に此字に「志業」の義も出來、「繼承」の義も出來たのである。されば『史記』張丞相蒼傳(卷九六)に「蒼爲計相時、緒正律曆」といひ、その『集解』に「文穎曰、緒尋也、或曰緒業也」と見えて居る。又た『莊子』讓王篇に「緒餘」とあり、その音義に「緒殘也謂殘餘也」といひ、又た『楚辭』九章に「緒風」とあり、その注に「緒餘也」といつて居る。これは「絲端」の原義から「殘」「餘」の義が出來たのである。たゞ可汗の稱號に「殘」「餘」でもあるまい。極めて之に相應はしいのは「繼承志業」の義であらう。蒙古語で「追隨する」「繼續する」を daghakluとといひ、「或る官若くは業に就く」を daghâkhu といふ(Schmidt, p. 266)。この動詞の語幹は dagha, daghâ であつて之に l を附すれば名詞となりて、その行爲の結果を示すことゝなる。そして蒙古語にて l は往々にして n に變ずるから、daghal, daghäl は daghan, daghân と同一である。予輩は「他汗」はこの daghan 若くは daghân の對音であらうと想ふのである。

伏圖に嗣いで可汗となつたのは その子醜奴である、之を

豆羅伏跋豆伐可汗　と號し、史家は之を「魏言彰

制也」と解して居る。白鳥教授は「蒙古語に制度、法制を türü といへば、豆羅伏跋豆伐の豆羅は拓跋語の豆盧と均しく、この türü の對音なるべし」といつて居らるゝが、その他の部分については説明を試みられて居ない。さて「豆羅伏跋豆伐」の「豆羅」は白鳥教授のいはれしが如く、即ち türü で「法制」「制度」である(Schmidt, p. 261)。その「伏」は名詞造格(instrumentalis)の接尾語なる bär の對音である。從つて「豆羅伏」türübär は「法制を以て」の義である。又た「豆羅伏跋豆伐」の「跋豆」は蒙古語 badara の對音であつて、此語には「擴大する」の義があると共に、「燒く」「光を發する」「照らす」などの義がある(Schmidt, p. 103)、最後の「伐」は buri の對音で、こは動詞を名詞とする爲に添加せらるゝ接尾語であること、なほ「丘豆伐」Küküelburi の「伐」buri と同樣である。されば「豆羅伏跋豆伐」は即ち türübär badarburi の對音であつて、「法制を以て照らすこと」の義である。

從つて史家は之を「彰制」と譯したのであらうが、固より完全の譯語ではない。

醜奴の殺さるゝや、その弟阿那瓌が立つたが、內亂の爲め、戰敗れて魏に逃れ、その從父兄波羅門が內亂を戡めて、嗣いで立つた。之を

彌偶可社句可汗　と號したといふ。而して、「魏書」には之を「魏言安靜也」と解して居る。白鳥教授の『東胡民族考』には此可汗號には言及して居ない。さて蒙古語に midal ügei jurik(žurik)といふ語があつて、こは「如何なる危險にも動搖せざる强固なる精神若くは意志」の義である(Schmidt, p. 217)、即ち「不動心」を謂ふのである(直譯せば失望せぬ勇氣の義)。所謂「安靜」は「安靜の心」であつて「不動心」を謂ふのであらう。こゝに「彌偶可社句」の「彌」(mi, mit)は midal の略譯であり、「偶可」(yü-ko)は ügei の對音であり、「社句」は jurik(žurik)の略譯であらうと想ふ。

その後阿那瓌が魏より歸國し、部落既に和し、士

馬やゝ盛なるに及びて、

勑連頭兵豆伐可汗　と號したといふ。史家は之を「魏言把攬也」と解して居る。たゞ『通鑑』(卷一五〇)胡三省注には「魏收曰魏言摠攬也」とあるが、固より大差はない。白鳥教授は「此の如き稱號の中、勑連の二字が蒙古語 tegri の對音にして天・神の義を有すること前段に述べたれば、魏書に此名號の全部を譯して把攬の義なりといへるは、明に粗略の解釋なりと謂はざる可らず」といつて居らるゝが、實際『魏書』の解釋が往々にして適切でないことは、上に說明し來りたるところに依りて明白である。例せば「不動心」若くば「剛毅」といふべきを「安靜」といひ「幸福に與かること」を直に「悅樂」といひ、「法制を以て照らす」ことを「彰制」といひ、「繼承」といふべきを「緒」といひ、「貞固」といふべきを「恒」といひ、「聰明」といふべきを「資質美好」といふが如き皆な然りであり、この「勑連頭兵豆伐」を「把攬」若くは「摠攬」と解したのも、亦たその一例といふことが出來やう。さてこの「勑連頭兵豆伐」の「勑連」はさらに「神聖」と解した蒙古語 tegri の對音である。又た「兵豆伐」は「北史」には「兵伐」に作つて居るが、『通鑑』(卷一五〇)は魏書と同樣である。予輩はこは「丘豆伐」の譌誤であつて、即ち蒙古語 Küteburi の對音であらうと想ふのである。そして「勑連」と「兵豆伐」の間の「頭」は名詞與格(dativus)の dur, du の對音で「に依りて」「に於て」の義である。即ち「勑連頭丘豆伐」tegridur Küteburi は「天に依りて統制すること」の義である。そこで史家は統制と略ぼ同義なる「把攬」若くば「摠攬」と解釋したものと見える。

三

以上略說した如く、蠕蠕の可汗の稱號は專ら蒙古語を以て、大した支障なく、解釋し得らるゝやうである。而して此國の所在につきては、『魏書』に「冬則

徙度漠南、夏則還居漠北」といひ、又た「社崙遠遁漠北、侵高車、深入其地、遂并諸部、凶勢益振、北徙弱洛水、始立軍法、：其西北有匈奴餘種、國尤富彊、…擧兵擊社崙、社崙逆戰於頻根河、大破之、後盡爲社崙所并」といひ、是に於てその境域、西は焉耆 Karashar の地、東は朝鮮の地、北は瀚海 Baikal を窮め南は大磧に臨むことゝなつたのである。頻根は Orkhon の對音であらうし、弱洛水は白鳥教授所說の如く Šarakha の對音にして、今の喀爾喀河であらうし（東胡民族考第三回）、蠕蠕が此間を本據としてその勢力を四方に擴張したものとせば、その所在に於ても後世の蒙古と同樣である。已にその言語が純然たる蒙古語であり、その所在が後世の蒙古と同樣であるとせば、蠕蠕を以て後世蒙古の先蹤とし、その人を以て純然たる蒙古人として不可なからうと想ふ。そして『魏書』（卷一〇三）『北史』（卷九六）の傳ふるところに依ると「蠕蠕姓郁久閭氏、始神元之末、掠騎有得一奴、髮始齊眉、亡本姓名、其主字之、曰木骨閭、木骨閭者、首禿也、木骨閭與郁久閭聲相近、故後子孫、因以爲氏、木骨閭既壯、免奴爲騎卒、穆帝時、坐後期當斬、亡匿廣漠谿谷間、收合逋逃、得百餘人、依純突隣部、木骨閭死、子車鹿會雄健、始有部衆、自號柔然、後太武以其無知、狀類於蟲、故改其號、爲蠕蠕」といつて居る。こゝに此國の起源につきて傳ふるところのものにして、その幾何が事實として信ずべきであるかは、他に參照すべき材料なき今日、固より確定し得べき限りでない。たゞ車鹿會は歷史的人物のやうであつて、その父の名を木骨閭といつたといふことだけは略ぼ信じ得らるゝやうである。固より「木骨閭首禿」の傳說は此族の姓「郁久閭」を說明せんが爲めに附會せられたやうに想はれないこともないが、何の因緣もなく、特に「木骨閭」を引合に出すこともなからう。といふのは『魏書』『北史』には「木骨閭與郁久閭、聲相似」といつて居るけれども、緊要

な「木」と「郁」とは全く異つた音であつて、此より彼に轉ずるとは絶對に出來ないからである。況んや車鹿會が已に歴史的人物であつたとせば、その父の名は世に知られ得るの可能性があり、單に「郁久閭」を説明せんが爲めに架空的に案出せられたものとは想はれないのである。已に蠕蠕が純然たる蒙古人であり、その始祖に「木骨閭」なる人物が(たとへ傳説にもせよ)あつたとせば、これが唐代の「蒙兀」「蒙瓦」後世の蒙古 Mughul, Mongol と何等か關係がなからうか。

蒙古 Mughul, Mongol の名稱につきては古來種々の解釋がある。或は之を「銀」の義なりとし、或は之を「痴鈍」「孱弱」の義なりとし、或は之を「無畏」「慓悍」の義なりとするも(詳しくは東胡民族考第九回を見よ)、概ね音聲の類似より説を立つるに過ぎないやうであるが、白鳥教授が、北俗に金屬の名を以て國號とするの例あること及び唐書に蒙古部と相對したる隣部落を落坦(Altan)部落即ち金部落といへるの二個の理由を以て「蒙古即銀説」に賛成せるは、中につきて最も傾聽すべき説ではあるが、予輩の上に説いた如く、純蒙古人なる蠕蠕の始祖を「木骨閭」とせば、「蒙骨」「蒙兀」「蒙古」は此「木骨閭」の轉訛でないかと想へるのである。「木骨閭」は已に白鳥教授の説けるが如く、蒙古語 Mukhur の對音であつて首禿の義である(東胡民族考第七回及東洋學報第五卷三五)。いふまでもなく蒙古語では mu, mo が mun, mon に變じ、k が g に變じ r が l に變ずるは普通の事であつてその例枚擧に暇ない程である。

次にこの國の名稱であるが『魏書』『北史』に「自號柔然」といへば、この國人の自稱は「柔然」であつたのであつて、「蠕蠕」なる名稱は後に至りて、敵國たる魏の太武が、音の相通によりて改めた貶稱である。又た『宋書』『南齊書』に之を「芮芮」とかき、『隋書』に「茹茹」とかけるは並に蠕蠕と同音異字たるに過ぎない。「柔」は「而由」の切であり、「然」は「如延」の切で

あり、又た「蠕」は『通典』「卷一九六)蠕蠕條に「而兗反」と注して居る。「而」及び「如」「弱」などには ź(j) と n との兩音があつて、こゝには煩を避けてその實例を擧げないが、漢代に於て已に確にさうであつたのである。しかし通例は ź(j) の音であつたやうで「作樂水」「鐃樂水」(Šarakha)を『魏書』には「如洛壞水」「弱洛水」などに作つて居る。されば こゝの「柔然」「蠕蠕」なども ju-jen, źu-źen などの音聲を表はしたものであらう。白鳥教授は『宋書』に「芮芮一名大檀、又號檀檀」とあるに據り、「柔然」「蠕蠕」即ち「芮芮」を直に「大檀」「檀檀」の同音異字と視て、「柔然」「蠕蠕」の音を ju-jen, jon-jen とし、「大檀」「壇檀」のそれを ta-tan, tan-tan としながら、「柔然」「蠕蠕」「大檀」「檀檀」を均しく之を賢明の義を有する蒙古語 tsetsen の對音と視て居らるゝ。實際蒙古語には s, š, č(ts), t などの間に音の相轉はあるが、しかし同時代に同國人によりて大切なる自國名などにつきて、發音にかゝる相違があらうと想へぬ。又た『宋書』に芮芮の一名を大檀といつたのは 予輩の見るところでは同音異字の爲めではなくして、後に說かんが如く他の理由から來て居るのである。教授はなほ tsetsen なる語を添加せる多數の蒙古人名を列擧せられて居るが、此語は人名に添加するとしては誠に相應はしい尊稱である。しかし國名としては如何であらう。予輩は寧ろ「柔然」即ち ju-jen は蒙古語 jušun の對音でないかと想ふ。此語には「法則」「一般に行はるゝ禮儀」の義があり(Schmidt, p. 291)、『三合便覽』には單に之を「禮儀」と譯して居る。又た仁義禮智信の五倫を蒙古語で ghuul jušun と曰ふといふ(Kowalewski, p. 2381)。ghuul は「源泉」を謂へば、ghuul jušun は即ち「人間行爲の原則」の義である。又た滿洲語で禮儀を jukšu といひ、蒙古語 jušun と同一語源に屬するやうに思はるゝが、女眞の遠祖と想せらる東夷人を「肅愼」「稷愼」Sukšin など稱するはこの

jiksin の音譯であつて「女眞」「女直」はその轉化であらうと思はるゝのである。又は「朝鮮」も或は此語に關係はなからうか。朝は『說文』に「旦也从軌舟聲」とあり、『唐韻』『廣韻』諸書並に「陟遙切音昭」であるといふ。尙ほ『集韻』には「追輸切音株」といつて居る。されば此字の古音は ǎau, ǎu(jao, ju)などであつたやうである(今でも廣東音では「朝」は ǎiu, ǎiu であり、「昭」は ǎiu である)。されば「朝鮮」は jušen と響き jušun の對音であつたやうで、古代支那人が東夷を「禮儀の國」といつた理由も解せられ、箕子を朝鮮に封じたといふ傳說もかゝる事情より起つたのではなからうか。之を要するに「禮儀」を國號としたのは獨り蒙古族の蠕蠕のみではなく Tungruse 人にも Korea 人にもあつたやうである。たゞ之等の國號につきてはその意味に關し、當時の史家が何等の傳ふるところもないのであるから、畢竟予輩の推測に過ぎないことは言ふまでもない。

白鳥敎授が『宋書』に「芮芮一名大檀又號檀檀」といへるに據り、「大檀」「檀檀」を「蠕蠕」の異譯と視て居らるることは已に上に言つたが、敎授は即ち「大檀、檀檀も亦た蠕蠕の異譯なるべければ、余輩は之によりて蠕蠕の音が nuan-nuan にあらずして žen-žen、芮芮が nun-nun にあらずして žoi-žoi、柔然が niu-nen にあらずして žu-žen、茹茹が nyo-nyo にあらずして žo-žo なりしを推知し得たり。何となれば大檀は ta-tan dai-dan, と音じ、檀檀は tan-tan, dan-dan と音すれども、その曾て na-nan 或は nan-nan と響きしを聞かざればなり」といつて居らるゝのである。しかし『宋書』に「芮芮一名大檀又號檀檀」とあればとて、大檀若くは檀檀を、必ずしも直に柔然若くは蠕蠕の異譯即ち同音異字であるといふことは出來まい。そはさきに一言した通りであるが、實際この名の可汗の在位は略ぼ魏太祖神瑞元年(西紀四一四)から世祖始光三年(西紀四二六)頃までゝあつて、恰も東晉の末年から

宋の初期に亙つて居る。從つて宋人は此可汗の名を以て此國を呼び、さてこそ「芮芮一名大檀、又號檀檀」といつたのではあるまいか、予輩は柔然若くは蠕蠕(芮芮・茹茹)と大檀若くは檀檀との間に音聲に非常の相違あるより視て、しか信ぜざるを得ないのである。果して然らんにはこの兩者の間には言語上何等の關係もなからうと想はるゝのである。

いふまでもなく大檀 Ta-tan (Da-dan) と檀檀 Tan-tan (Dan-dan) とは同語の異譯であらう。この語について當時の史家は何等解釋を與へて居ないから、そが何語の對音であるやは、今的確に之を知ることは出來ない。たゞこの可汗が內は內亂を戡め、外は魏と死戰し、「牟汗紇升蓋」即ち「制勝」の號を取り、極めて有力であつたことは『魏書』に依りて知られ、その名が遂に蠕蠕の一名となつたことは『宋書』に依りて知らるゝのである。そして蠕蠕が純然たる蒙古人であつて、且つこの一名があつたとすると、後世蒙古人を韃靼 Tatar, Tartar と稱する、このTatar, Tartaはこの可汗名に由來したものでないかと想はるゝのである。語尾のr音を表はすにn音を以てするは支那譯音の通例であれば、「大檀」「檀檀」はTatar, Tartarを表はしたとして極めて適切なるを覺ゆるのである。

Tatar, Tartarにつさては通例『唐書』沙陀傳及び地理志に見ゆる「達靼」「達旦」を初とする。但 Parker氏に至りて、始めて『魏書』(卷一)に始祖力微の三十九年諸大人に告げて、「我歷觀前世、匈奴蹋頓之徒、苟貪財利、抄掠邊民、雖有所得、而其死傷、不足相補、更招寇讎、百姓塗炭、非長計」といへるを引き、この「蹋頓」をTatarなる名稱の初見として居る(Asiatic Quart. Rev., 1904, p. 141. Cordier, Ser Marco Polo, p. 55 引用せるところに依る)。此所說にして誤らないとすると、此名稱は遙に後漢末に於て已に存在したといはなければならない。即ち曹操が烏桓を遼西に攻めてその蹋頓を斬つたのは後漢獻帝建安十二年(西紀二

○七）の事であつて、『後漢書』（巻九）『魏志』（巻一）に見えて居る。『後漢書』章懐注には「蹋頓匈奴王號」といつて居るが、果して何の據るところがあつてか不明である。又た「蹋頓」の發音につきて『通鑑』胡三省注には「蹋徒臘翻」といつて居れば、「蹋頓」と Tabar との間には音に多少の相違がある。若し章懐注にして信ずるに足るとせば、「蹋頓」は寧ろ吐屯 Tudun の異譯と視てよからうと想ふ。要するに Parker 氏の所說は單に音の類似に本づくに過ぎないのであつて、未だ遽かに贊成することは出來ない。從つて予輩は暫く蠕蠕の別號なる「大檀」「檀檀」を以て Tatar, Tartar の初見に擬せんとするものである。（完）

「胡牀につきて」追記　本誌前號所載拙稿「胡牀につきて」中第四五二頁第四－五行「太平御覽等書の類書に引用せる云云」の上に「藝文類聚」の四字を加へたい。度屑吾の胡牀詩を引用せるは現存類書中此書が始めである。なほ机につきては說くところ極めて粗に、且つ誤もあれば他日別に補足訂正の機會を得たいと思つて居る。

池内博士の「元代の地名開元の沿革」を讀む

箭内　亘

一　緒言
二　新開元と舊開元
三　開元路治東徙說について
四　開元路治三姓說と始見時代の開元の地域
五　路と道との異同
六　山北遼東道について
七　遼東路について
八　結言

一　緒言

余が滿洲歷史地理の第二巻に「元代に於ける滿洲の疆域」と題し、當時の行政區劃に隨つて、遼陽路以下各路の疆域に就いて卑見を發表してから、あだかも十年の歲月を經過した今日、その中の開元路に關する部分に對し、はからずも畏友池内君の高評を